

# 甲状腺外科草子 164

## 哲人宰相：大平正芳余話㉒

杉野 圭三

### 大平語録（後）

**派閥**：派閥的活動というものは、いい方向に働きは許容できるものじゃないか。これが例えれば人事その他のエゴイズムに走ることがあれば、矯（た）めていかなければならない。派閥的活動は人間の集団にはある程度、避け難いものである。三人寄れば派閥はできる、政界はジェラシーの海。

大平は派閥の功を3つ挙げている。

- ①政治家ないし政治集団の活動の根源である政治的エネルギー・活力を生む場所
- ②政治的権力の独裁をチェックする機能
- ③サロンないしは勉強会的に気心の知れた者同士が自由にモノを言い、親睦を深めるオアシス。



**権力**：権力と言うものがそれ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならないはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許される。権力は抑制的でなければならない。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許される。権力者は「全能の幻想」を持ってはならず、慎み深く韜晦の気持ちがなくてはならない。政治とは鎮魂である。どんなにお粗末でも権力のための権力を考えていく権力はいない。その場合でも、権力の主体は往々にして「安定」というような高次の目的に藉口（しゃこう）することを忘れてはいない。権力が考えなければならないのは、自らのイデオロギーに同調と理解を求めるこよりは、こういう無関心な厚い層をいかに自らの存在に有益なもの、ないしは少なくとも無害なものにする工夫を通じて、自らの基礎をかためることではあるまいか（新権力論）

また次のようにも述べている。

世界史の運命がけわしくなってくると、か弱い寄る辺なき人間がその奔流に流されることを黙視するわけには行くまい。そのためには、あらゆる術策を用意しなければならないのは已むを得ないことである。しかし権力の本体は、そういう術策にあるのではなく、権力者自体の在り方にあるのだということだけは銘記すべきであろう

### 施政方針演説（第87回国会）

我々が、今日指している新しい社会は、不信と対立

を克服し、理解と信頼を培いつつ、家庭や地域、国家や地域社会のすべてのレベルにわたって、真の生きがいが追求される社会であります。各人の創造力が生かされ、勤労が正当に報われる一方、法秩序が尊重され、自ら守るべき責任と節度、他者に対する理解と思いやりが行き届いた社会であります。

私はこのように文化の重視、人間性の回復をあらゆる施策の基本理念に据え、家庭基盤の充実、田園都市構想の推進等を通じて、公正で品格のある日本型福祉社会の建設に力をいたす方針であります。

### 大平の好んで使った言葉

**在素知贅**（ざいそちぜい）：生活を質素にし、知的なものはぜいたくにするという意味

大平は、ゲーテの「人生は結果ではなく過程である」という言葉を引いて、「汗をかき力をこめて当面する困難に立ち向かってその打開を試みる過程が人生である」と述べている。（在素知贅より）

**良賈（りょうこ）**は深く蔵して虚しきが若し：

優れた商人は、品物を奥にしまって店頭には置かないから、一見すると品不足のように見える。賢人も、自分の識見や才能をひけらかすことがないから、物を知らない人のように見えることをいう（史記、老子伝）。大平が晩年よく揮毫した言葉。

**為政三部書**（張養浩、安岡正篤訳）：思想家、哲学者として知られる安岡正篤（まさひろ）の訳した有名な書。吉田茂をはじめ多くの政治家が指南を受け、大平もその一人。以下の内容を含む。

### 廟堂忠告十カ条

- ① 修身（身を修める） ②用賢（賢者を用いる）
- ③ 重民（民を重んじる） ④遠慮（先々に心する）
- ⑤調燮（ちょうしょう、整えやわらげる） ⑥任恕（恕を受けて恐れぬ） ⑦分謗（同僚の謗を我も分かつ）
- ⑧応変（変に応じる） ⑨献納（忠言をたてまつる）
- ⑩退休（いつやめるか）

**任怨・分謗**（にんえんぶんぼう）：怨（うら）みを任じ謗（そし）りを分かつ。大事を行う時には誰かの怨を受けることは当然、恐れていては何もできない。怨も一心同体で分け合って受ける気概が必要。

林芳正（元外務大臣、官房長官）は「大平正芳とその政治再論」の中で、「お釈迦様のような人」と題して、大平哲学・政治姿勢、政策の正しさと重要性を再評価し、「六十点主義の政治」、「普遍的価値を守り抜く覚悟」、「財政再建の道を捨てない」など宏池会の精神を述べている。

大平の目指した政策は党内の亀裂などで未完のまま終わったが、深い哲学的思想は限りない。ひとまず、大平の次の言葉で筆を擱く。

「人の一生には悦びもあれば憂いもある。得意の朝もあれば失意に沈む夕もある。栄光を浴びる場合もあれば、辱めに耐えねばならぬ局面もある」

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2026年1月16日